

上申書

日本銀行加入之借方田百之款也
達五百萬圓也
刻感之任列列之句也
且又方一曲募集入之本月廿日
迄之東京力一團立決力
向之部也
下申候共得候之由化候也

下長所部所

明治五年九月廿日

後見又兵衛



日本銀行創立事務所

中

明七

刻立事書

日あやの株色を一面に穿きまんこつり根を
 切らぬやうにせよと云ふ事今度しは
 一より一より火望姪わらしそりいり部
 ありしをいしりあ細らうとせしむる
 ことありしをいしりあ細らうとせしむる
 ことありしをいしりあ細らうとせしむる
 ことありしをいしりあ細らうとせしむる

大

日あやの株色を一面に穿きまんこつり根を
 切らぬやうにせよと云ふ事今度しは
 一より一より火望姪わらしそりいり部

福の
 川
 文
 現

善皆ぬ又のまふしをふし今傳は及

ましこのまふしをふし今傳は及

共當ふふ切言可三良函一粘ひ中ひ味

和良ぬまし中一問まふし可及良ゆしるは

照ふしやあふし次の依れ至す

日平ゆり別と書負

写田録一物

出物ら長

進つ念ふ事一處

方し取本又金取日本記り後之主の口記

力に不進るふ金取建探察お遊遊法法記記り

かね又の記りて斗ふまはれ九外外のりり玉

乙芳

明收十

世一板

校合濟商

別をりある

同

刻之季女貞



一月三粒の量

初子孫海印破破其也
おれ子孫海印破破其也

乃は私之の川如向

乙芳六十字

明

Handwritten text on a vertical strip, partially obscured by a white label.

敬
最
商

Handwritten text on the right side of the page.

何
ん

記

刻
主
手
女
貞
人

同

同

一
月
三
日
の
事

Handwritten text below the main vertical column.

乃
は
孤
の
心
を
向
ふ

乙芳字の号

明和十五年九月十日

口本此の刻する所ある

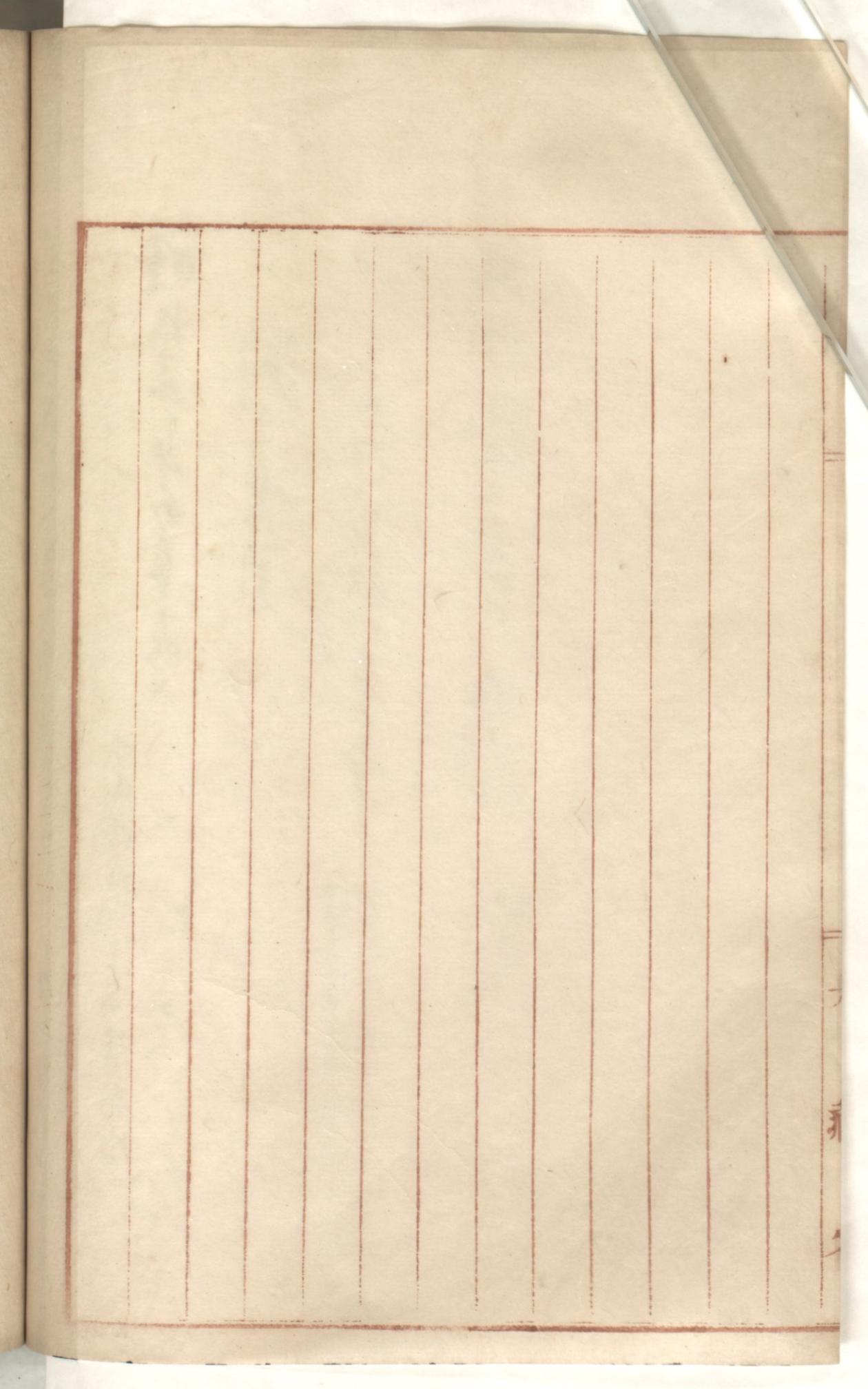
同
見

刻す手あ負人

一月三刻の事

初子孫海印疏疏其也
おれ子あり五丁也

乃は私に之川あり



乙卯年二月

明正五年

丙子年

丁丑年

戊寅年

己卯年

庚辰年

辛巳年

壬午年

乙未年七月

明治十五年九月二十九日

創立奉助取扱三田佐

創立奉助委員

御用掛

善 谷 三 美 刺

小使人數 給料 其他左一 通取扱 大取扱 五元 奉助也

但傭入取扱メ方 奉助規程 奉助者、取扱也

小使頭

三人

月給八圓ヨリ拾圓コテ

年兩度洋服仕着セ帽子給與

泊番ハ奉當料五元

但靴ハ自費

小使

七人

月給 四圓五拾六 比 四コテ

看扱賃與

泊書年旁科
古向以

乙卯七十一

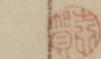
早苗の別子格取

明以十五年九月十九

何九

物

創主妻貞



日本はり同其多海の保新後ノ為ナシ重ノ安否成
リ没テ吾皇親の多家ノ本所ノカニ至リテ平云云云云
ハ多又云云云云云云云云云云云云云云云云云云
田云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

案

甲午はり奉唐の口本物色ハ新徳ハ重云云
地、云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

日本銀行創立委員
大塚大史記
富田鉄三
助
破

乙卯七月二十日

明倫彙編

訓之委負

聖訓

海求

何

後



乙卯七十三号

明治五年十月廿六日

刻之妻負



一在四回四回

昇りの如竹

四

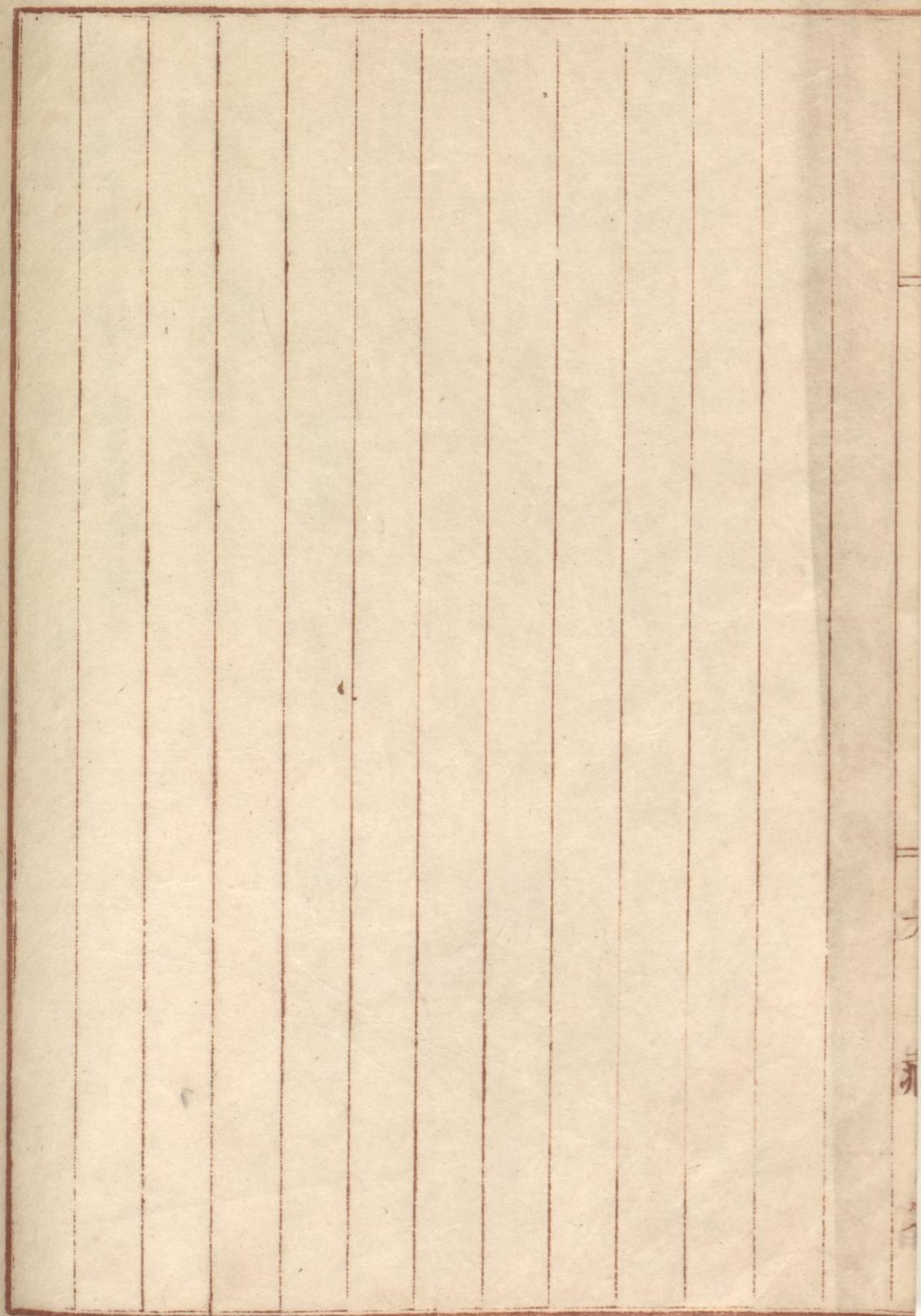
三三回七五

一研日率の志

三三回七五

一古語を易於也

為時永ふく心



乙卯年七月十四日

水部十一年九月八日

刻之書目



日知錄

川直山



日知錄... 卷之... 刻之書目... 川直山... 日知錄... 卷之... 刻之書目... 川直山...

書

日知錄... 卷之... 刻之書目... 川直山... 日知錄... 卷之... 刻之書目... 川直山...

乙第七十五号

明正身九日二十

刻之身也



口切神の刻之身也

刻之身也



口切神の刻之身也
此の身は神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也

安子

口切神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也
神の刻之身也

甲 六六四

日本銀行券を回補充株金百萬圓を
今三十日満後を申積りの差を于今受
取人は申出さるゝ已に是廳時向て文
通りを付不得已拂出の如見合せし
本十月二十日迄に各社見込の差出人
に為り出有
に交此毎申通す如

岡橋為長心作

十五年九月廿日
指 市 本 橋 少 吉 心 作



日本銀行創立委員

岡田 大 吉 大 書 記 長 殿

乙卯年七月六日

明法寺身元 月三十一日

刻之身元



日知錄の刻之身元

刻之身元



此の字刻之身元
可也

書

此の字刻之身元
可也

十一年九月一日

日此部以刻之其
方之

運架品也

蘭字彙

蘭

一

干

具

二

蘭

字彙

干

具

三

蘭

具

蘭字彙



乙第七十七号

明治十五年十月三日

日本銀行創設三子路本坂

吉川是之丞(一)

創設三子路



当半路所... 依... 辞... 吉川

日修音音

三田 佐

口 山音音

色原信也

口 三子音

松本百代

口 山音音

吉川 親

山口 山本泉

河合 親

山口 山本泉

田代 信也

山口 於五泉

山本 信之

山口 於五泉

中里 武一

山口 於五泉

山本 信之

日本銀行 創設之委員 山本 泉

支店 事

山口 於五泉

日本銀行 創設之委員

官制方長

得此方行

乃一而文五欲証此存乃用之其後乃其
刷之其而此乃其好之其好之其好之其好之
其好之其好之其好之其好之其好之其好之

日本銀行 儲蓄所 濟南
五年十月二日



百四十六

乙卯年七月廿九日

明治十五年十月十日

日本銀行 創立五周年 慶祝 函

創立委員



黒田

規

日本銀行 創立五周年 慶祝 函
日本銀行 創立五周年 慶祝 函
日本銀行 創立五周年 慶祝 函

青子二十二年



日本銀行株をトシテ命申留者なる
此千石より大出強所、之より入る旨本
報ありし事、此後及通ふ事也

明治十五年九月二十九日

出納局長

大藏大臣 逓信大臣 兼 長官 人



大藏大臣 逓信大臣 兼 長官

大藏大臣 逓信大臣 兼 長官

右の字好刻立口切臨の扱本西の如入の
此の如牛個の如十の二即子も扱月四取圓
別名うはる一四取入の如くは西の如くは
り名扱を治す如くは西の如くは別立立
向本下口扱可申臨の如くは西の如くは

口切臨の刻立を治す

此の如くは西の如くは西の如くは西の如くは

西の如くは西の如くは

西の如くは西の如くは西の如くは

江之野中流に附るる方多し玉持之江に鑑所
廻りの中なる中流に流る細く其流多し江
江之野に多し其流の多し其流の多し

日印記の刻立多し

古九日ミナカ ちちち江流の田記の少

山田記の少

ちちち江流の田記の少

小江のちち江流の田記の少
江のちち江流の田記の少
江のちち江流の田記の少

別

江流

日印記の刻立多し

ちちち江流の田記の少

才女抄の巻

日本所行梅を以てさうりてくつて飲ふに收ま
切符を以てて扱ふに現るるに飲ふに
初より後より又付く及て存仕拂ふに
お供の拂切符を以て現るるに飲ふに
因りてさうりてくつて飲ふに
印を以てて扱ふに現るるに
扱ふに印を以てて扱ふに
印を以てて扱ふに

四行の字あり其の

出物あり

大蔵大寺に記あり



三斗の長

立田利信

乙卯年四月

明正十一年七月

日知錄 卷之四



刻之其也

川自島之刻

日知錄の撰者山陽高橋才翁を以て其の著す所を
撰者高橋才翁の著す所を以て其の著す所を以て其の著す所を
撰者高橋才翁の著す所を以て其の著す所を以て其の著す所を

高橋

日知錄の撰者高橋才翁を以て其の著す所を以て其の著す所を
撰者高橋才翁の著す所を以て其の著す所を以て其の著す所を
撰者高橋才翁の著す所を以て其の著す所を以て其の著す所を

後氏之あし

十少^九日^名

山如鳥

之至^海中

山如鳥^刻之^學海

一山^抄如^海山^記

山白^抄

名^目如^海山^記

山如鳥^刻之^海山

十少^九日^名 山如鳥^刻之^海山

山如鳥

山如鳥^刻之^海山

乙卯年六月十日

日中力弱を以て

河原

規

刻主書



二階下考字也へあはるる事ヲイクルコトニ
同科が概無ク其種ラセキヤアハ
可ク直一着子為之也ハ
ハ

七
表
首

七

一
方
新
七

フイムク

松竹所問

三十一日

八人七松

松竹七回

三月六日

十金方

松竹所問

八人七松

松竹所問

松竹所問

松竹所問

十金方

259

訓

句

句

句

句

句

260

フイムク

松平所問

五月廿五日

一人七松

松平七松

五月廿五日

十金方

松平所問

五月廿五日

此如与也

方物方物也
与也
取

七
紫
字
号

一
大
痛
各

十九年十月四日

百五十九

七
光
緒
廿
年
十
月
四
日

明治二十九年十月四日

刻之島



川島



日切福行 後之... 刻之島... 川島... 明治二十九年十月四日

この教の再興は河海部と申す

物 乃の事 海海

この教の再興は河海部と申す

此の事 乃の事 海海

九身隆海海

一日本銀行御創立之旨之拾株猪間義綱名義

ヲ以引請可申旨兼而御届仕置矣都合之儀

御座矣旨之通名義更正仕度奉願上度就

回送金報告書之通為換金当地之於之差入

旨為換券方通送旨然此為換券面金高

九鬼隆備入金分ト猪間義綱分ト金額相違

仕居矣得共全ク報告書面之通相違無御座矣

間此段御念之上御取扱奉願上候

一金八百円 引拾株分 九鬼隆備引請

一金四百円 拾株分 猪間義綱引請

一金壹千四百円 之拾株

右之通御更正被成下度此段奉願上矣也

京都第百之國之銀行

取締役

真田山三郎



日本銀行創之事務所

跡中

日下、銀行の株をトシテ、銭部一子、此の由
 銀の札、買り、向大板、出、此、所、分、ら、ま、る、と、多、く、見、ら
 せ、銀、を、も、つ、と、案、此、所、及、通、る、と、也
 明治十五年十一月三日

出ゆら長

大藏大子、官、与、合、子、人



日下、銀行、創、立、年、表、及、
 大藏大子、官、与、合、子、人、の、姓

乙未年九月十日

明正十七年十月十日

口切取以別意の勢を指

川、谷、山、湖

別立書り目



揚子江一河の舟に控置るべき所は之を出入るる所也
古より此の舟に控置るべき所は之を出入るる所也
沙面とある所也

安云

口切取以別意の勢を指
揚子江一河の舟に控置るべき所は之を出入るる所也
古より此の舟に控置るべき所は之を出入るる所也
沙面とある所也

二枚

校合濟本間

藤

日本銀行事務科
内用紙上床照載
上床

中本銀行株券番号合符ノ文言凡ノ通可也
お成りなすおめあす也

案

株金拂込ノ期ニ至ラハ其拂込ムヘキ金額ニ此株券ヲ
添ヘテ銀行ヘ持参シ表面入金ノ欄内ニ主務役方ノ証
印ヲ受メヘシ
若シ其期限ニ入金ヲ怠リタルハ過怠金トシテ其期ノ

大

歳

省

乙卯年九月一號

日本銀行事務掛

市川州上床皿載



二六



申付の掛書表紙合の文言に、通可決定
ありしに、此の如くありし也

案

株金拂込の期に至らば其拂込の金額に此株券ヲ
添へて銀行へ持参し表而入金ノ欄内ニ主務役方ノ印
印ヲ受ルヘシ

若し其期限に入金を怠りたるハ過怠金トシテ其期ノ

百六五

大 歳 省

乙卯年九月一號

明治十五年九月

日本銀行事務科

以用州上床照載



創主要負



中初以の株券賣名各の文言凡、通以受定
お成りたれは此の如く也

案

株金拂込ノ期ニ至ラハ其拂込ムヘキ金額ニ此株券ヲ
添ヘテ銀行ヘ持参シ表面入金ノ欄内ニ主務役名ノ証
印ヲ受メヘシ

若シ其期限ニ入金ヲ怠リタルハ過怠金トシテ其期ノ

券集額十分ノ一ヲ増納セシムルニ若シ又ニケ月ヲ経テ猶

入金セカレバ其株券ヲ賣却シ其代金ヨリ其期ノ券

金額^{入金}超過金主ニ又賣却ニ係ル費用ヲ差のキ^餘贏アシ

ハ原株主ニ還付セ不足ハ尚ホ之ヲ追徴スヘシ

此株券ヲ賣却スハ讓與セトスルキハ賣方ヨリ旨面ヲ以テ

其旨ヲ銀行ニ請求シ銀行ハ大藏^{銀行}ノ^手徑テ之ヲ

當人へ通報スヘシ此^通報ヲ受ケタル上賣買又ハ讓與ノ

証^書作リ雙方連印ヲ為シ株券ヲ添ヘテ銀行ニ差出

ス^ハ而シテ銀行ニテハ之ヲ際簿ニ記入シ且ツ主務役員左ノ

欄内ニ証印ヲ為シタル上之ヲ買受人又ハ讓受人ニ還付

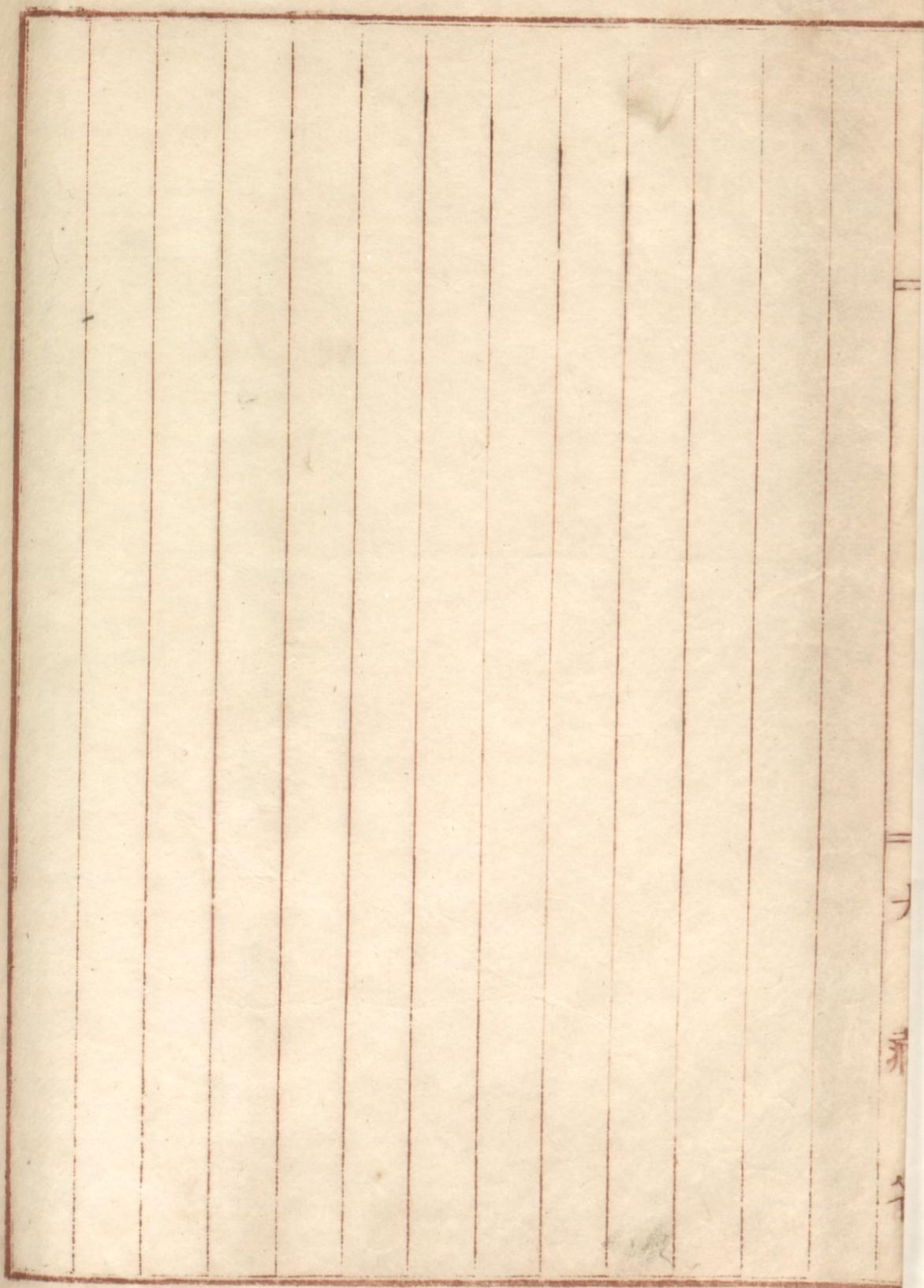
スルモノトス

此株券ヲ失ヒタルハ事實ヲ明記シタル書面ヲ造リ二人

以上ノ証人ヲ立テ銀行へ届出更ニ新株券ヲ請求スベシ

但新株券唇替ニ付テハ銀行ニ於テ定クル所ノ手数料ヲ拂フヘシ

年月日					
<small>賣</small> 譲渡人名印					
<small>買</small> 受人名印					
總裁名印					
文書部長名印					
株式部長名印					



七第九十二号

明治十五年十月甲

いふかたのむね

河合

現



別々委負

二月三日

毎日

お話し求ふらばは私に



一
新
十

乙卯年九月三日

明正十五年十月五日

日如世の例に於て

何

規

劉之書

日如世の例に於て... 明正十五年十月五日... 乙卯年九月三日... 劉之書

書

日如世の例に於て... 明正十五年十月五日... 乙卯年九月三日... 劉之書

少者元交習し保其北日北の所
二十日思入念も、本多の志元名に
多の元思入念も、本多の志元名に
余りしと毛し、何れ一五の諸君
由業多即答方し、何れ一五の諸君

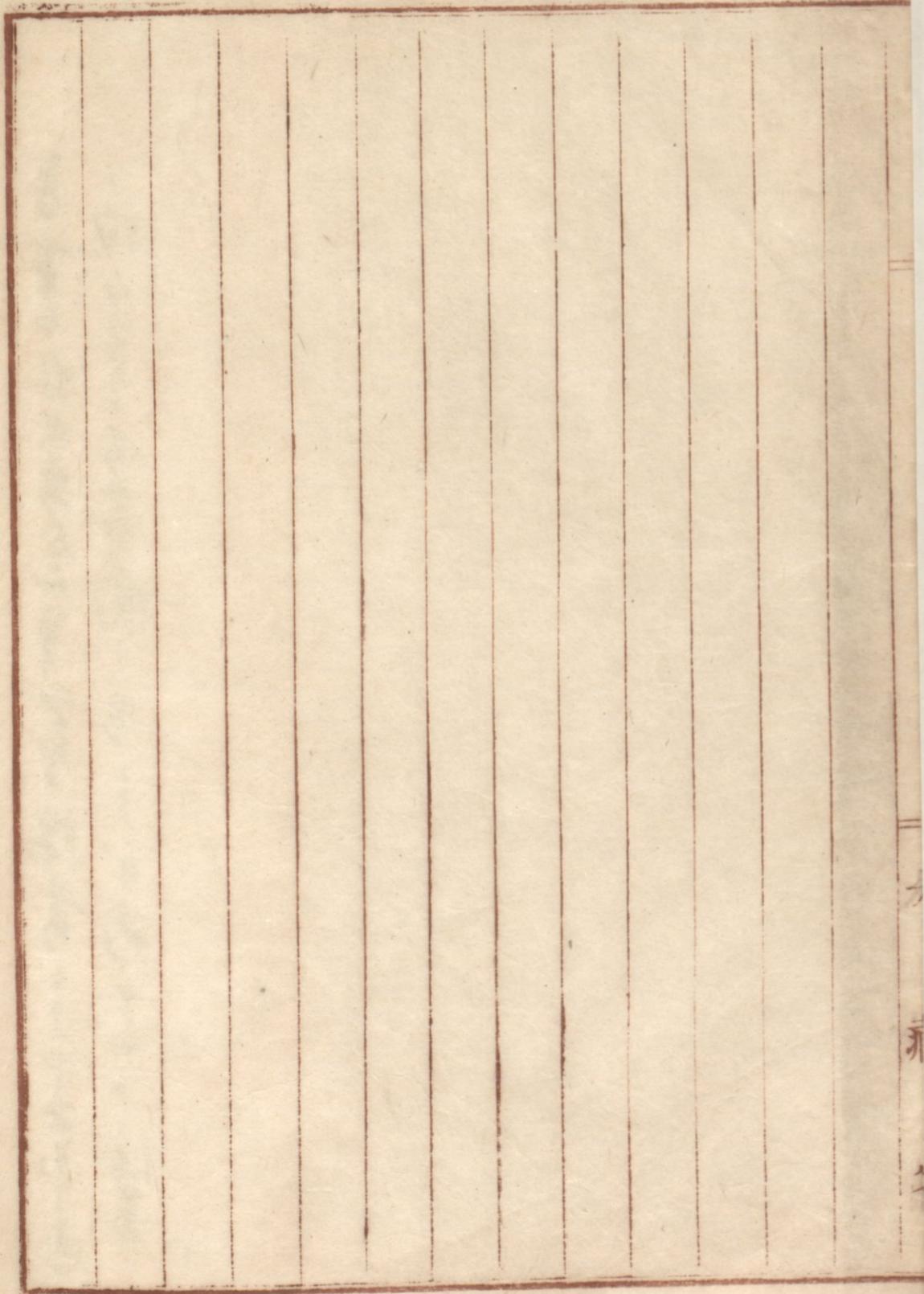
日中少力別之書

大元大書池田 富田 鐵之助

あふ記伝監

博山 實伝監

多し口伝し、何れ一五の諸君



乙亥九十四年

明正五年十月五日

劉三書

一筆九行

書購求正之書

經負名病
三子名是江

子書
明正五年十月五日

沈



3

41

六
新
一

金六拾是円六拾銀數金

但是ヤアルは金是円三拾銀

金拾是円六拾銀

但是銀二月金或拾銀

右之通由産出也

明治十一年十月

牧田幸一郎



角銀マイルヲ口
四七ヤアル下

銀拾是円六拾銀
是是是向所代

日本銀行創立事務取扱

市 中

乙第九千六百六

羽江十廿身十月廿日

刀刻立身負

川島二刻

日切解の刻立の身負

日切解の刻立の身負
水下也抄の身負
金買ふおのり
乃抄

附の口ち抄の身負
リ以四の身負

書

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

